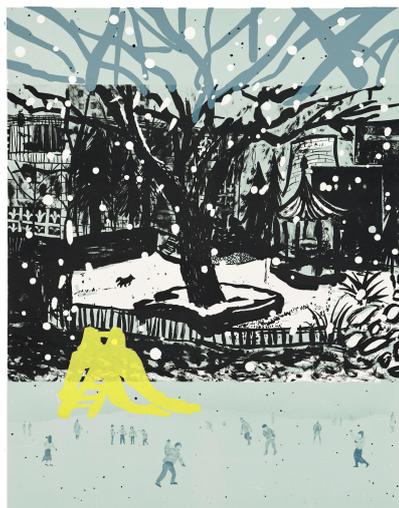


美術専攻 版画研究領域

カク ソヘイ

# 郭 素平



漫る歩き—雪／漫る歩き—雨／漫る歩き—風

リトグラフ、雁皮刷り

## 漫る歩き—雪／漫る歩き—雨／漫る歩き—風

記憶とは、過去の出来事の単なる記録ではない。それは時間の経過や現在の感情によって絶えず書き換えられ、再構成され続ける流動的な生命体である。私たちは人生という時間を歩みながら、その時々視点で過去を振り返り、記憶という曖昧な時空を往来し続けている。本制作は、「風景による記憶の曖昧さと再構成」をテーマとし、版画表現を通じてその不可視のプロセスを視覚化する試みである。

着想の重要なヒントの一つに、かつて展覧会で目にしたデイヴィッド・ホックニーの連作版画「The Weather Series」がある。雨や雪、霧といった気象現象が版画で表現されたその風景に触れた際、私はそこに、単なる天気描写以上の流れる「時間」の可視化を感じ取った。そこで本作では、風景の中に「気候」を取り入れることとした。画面の中を吹き抜ける風や降り注ぐ雨は、刻一刻と変容し、二度と同じ形をとどめない記憶のメタファーである。

広大な風景の中には、小さな人物と一匹の犬が描かれている。この巡礼者のような存在は私自身の投影であり、同時に鑑賞者一人ひとりの姿でもある。広大な自然の気候の中に置かれた小さな存在は、世界に対する根源的な「孤独」を漂わせると同時に、ただ淡々と歩みを進めるその姿によって、ある種の「癒し」や、過去を受け入れる静謐な感情を内包している。これは、人生を「絶え間ない歩行」として捉え、記憶の中を頻繁に往来する私たちの心の在り方そのものである。

表現技法においては、リトグラフ特有の積層表現を用いた。インクの色面を幾重にも重ねることで、空気の湿度や光の温度、風の動きといった不可視の気配を定着させた。

本作品における風景は、個人的な記憶に基づきながらも、他者と共有可能な「集合的記憶」へと開かれている。作品に漂うノスタルジアは、過去への憧れと、もう戻れないという哀しみが入り混じった複雑な感情であるが、この「気候の記憶」の中を歩く旅が、鑑賞者自身の奥底にある風景と重なり、言葉を越えた静かな共鳴をもたらすことを願っている。